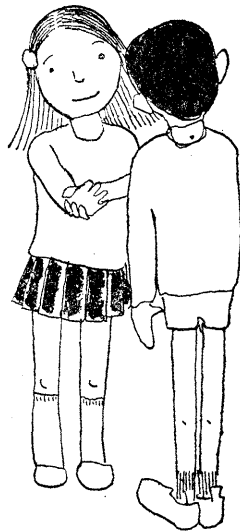


私の幼児教育論(上)

高杉 自子



保育実践論を書くことをお引き受けしたものの、自分のザンゲ記録というか悪戦苦闘の反省記録の域を脱しないことを始めにお断りしておきたい。

教師生活の滑り出しは小学校教師、幼稚園に配置転換させられたのは昭和二十二年だから、それから数えると三十七年になる。

でもその頃、自分には納得できなくて、三ヶ年で小学

校へ戻してもらった。その子供達は幼稚園四歳から六年生まで八年間受持ち、卒業させて、再び配置転換を命じられ、本格的に幼稚園教育に取り組んだのは昭和三十一年からである。クラスを持ちながらの主任、教頭の九年間を過ぎた。それこそ小学校教師から幼稚園教師への転換、脱皮のために精一杯の苦しい九年間であった。若い先生方から二言目には小学校的と言われ、どうすれば、

幼稚園的なのか、さんざん悩んだものである。

幼稚園的と認められるまでの過程は長く、前者から、脱皮するまでは、かなりの年月を要した。もしかすると、まだまだ本物とは言えないかもしれない。その道程は遠く、これからも続くであろうと思うのである。

先日、ある幼稚園で研究保育をみてショックを受けた。

その先生は、教師三年目になる。子供に体当たりしてかわる、よく考えながら保育をしているし、よく反省もしている。子供を引っ張ることに抵抗をもち、指導するという言葉を使うのも厭がっていた先生なのである。

ところが、その日は、ザリガニをOHPのパネルの上のせてクラス全員の子供たちに見せ、形をとらえさせ、各グループに、一匹ずつパックの上のせたザリガニを配った。更に八つ切りの画用紙と細いサインペンを一人ずつに渡してザリガニの観察画をかかせた。すぐに取りかかれたのは各グループ一二人位、三分の一は立往生してしまった。

私は、この先生の保育をみて、まるで別人かと疑いたくなるような気持ちにかられた。どうして、このような計画が浮かぶのか不思議であった。引っぱるのが厭だと思う人が、「セエーノ」と子どもを揃え、同一条件を提示して無理やりに追い込んでいくことに自己矛盾を感じないのであるか。このような保育では教師の助言は、表現技術に限られていくのだが、どうして気づかないのか、と理解に苦しんだ。子供の苦悩にみられる表情も気づかず、仕上がった絵だけを気にしている先生を見て、なぜ、こうなったのか、と考えた。案外これが教えることの原型というものであり、教育とか、指導とかの言葉からくるイメージは、このようなものなのかもしれない。この方法がずっと簡単で、やさしい。だから、幼稚園教育は分りにくいと言われるのではないかと思った。それに、午後の研究会で小学校教師上りの指導主事は、系統的な授業でよかったと評したのを聞いて、授業と保育のちがいを思い知らされた感があったのである。

子どもが見えてくるまで

昨年十一月に中央教育審議会内容等検討小委員中間報告の中に、学校教育の硬直化画一化が問題点として指摘されたのは衆知のことであろう。

実は、この画一化や硬直化は幼稚園教育の中でみられる問題点でもある。特に学校といわれ、それが科学化され、分析的になればなる程、形式化が進んでいくのである。

つまり、ベテランの先生といわれる人が、管理的な授業を行う。即ち混乱を起さないために計算しつくされた指導案に従い、しぼられた目標に向って、統一された内容方法を限定し統制のもとに学習活動を展開させる。一糸乱れない授業、水も漏らさない授業をよしとされるのであるが、果してどうであろうか。子供たちの考える余地がない、自分で考え疑問をもち試すこともできない授業で何が子供に身につくであろうか。大人から言われた通りの一つのメニューの食べ方しか知らない、あるいは

決ったレールの上しか走れない子供を育ててしまうのではないか。次第にそこには問題を感じなくなり、現在の学校教育はますます管理的にエスカレートしてしまいう傾向にある。そしてここに問題を感じないところに画一化、硬直化の原因があるのではないか。

ところが、恐しいことに、この傾向がそのまま幼稚園教育に下りてきているのである。

学校であるとか、教育であるとか言うことが、この傾向を定着させつつあるのではないか、実は、私は、この考えとの戦いの連続であった。

それは、ねらいとか内容にしばられることにある。何を教えるかということばかりが頭を一杯にする。幼稚園でいえば何の活動をさせるか。という観点だけでしか活動を見ないので、子供が見えてこないのだ。具体的に言えば、砂遊びをしている、鬼遊びをしている、かけっこしているという活動が見えれば安心して、それ以上見ようとしなくせがついてしまっている。一斉に活動している時は、教師の示すままに活動しているかどうかしか見

ない。それすらも見ないで提示だけして自分の言うことを聞いているかどうかだけを見るくせがついている。しかも教師が決めた限定した内容をいかに立派に伝えるか、それが系統的であるとか構造的であることが価値的であると考える。しかも多くの場合、この系統も構造も教師側からとらえたものでしかない。それで果してよいのであろうか。

この場合、学習者、即ち主体者である子供が忘れられていないか、内容を身につけなければならないのは子供であって、その学習者の立場に立たなければ何の意味もないことになる。それが忘れられることに、大きな問題が起きた。落ちこぼれを作ってしまった理由もそこにあるのではないか、と思うのである。

ところが、子供が見えることは大変なことなのである。表面的にはいくらでもとらえることができる。何の活動をしているか、どういう行動をしているか、は見ればわかる。しかし、それは、本当に見えていないのではないか。子供が見えるということは、子供の立場に立

ち、子供がみていること、子供が考えていることが伝わってくることである。子どもの喜びや悲しみというような感情も「おもしろそうだ」「やってみたい」「何だろう」などというような興味や願望、疑問、発見等も通じ合うことである。教師と子供の間には、共感や了解が成立する関係になることであらう。

共感の成立

共感が成立することは、そう簡単なことではない。まず子供がありのままの自分を相手の大人に委ねることができるような信頼関係が基盤に必要である。

私は始め、教師と子供は簡単に信頼関係が成立するものだと考えていた。

入園当初、泣いて厭がる子供も親からひきはなすことになっていち早く自立の一步を踏み出させることができると考えていた。そして幼稚園での生活のし方を一通り教えこむことによって、幼児は理解して行動できるようになる、それが安定であり、幼児が喜んで登園すること

になると思いこんでいた。つまり、それは幼稚園側から考えた子供に対する注文にしか過ぎないのである。お恥しいながら子供がどのような気持で登園するかを考える余裕はなかったようだ。「どのように適応するのか」が問題であった。

実際に、子供たちは、からだ全体でさまざまな抵抗を示した。拒否や反発、あるいは殻を閉じて敵として受け入れない子供がいる。それを適応しにくい子供たちというような十把一からげの解釈としていたようだ。

子供からみれば、いくら教師が母親にかわる存在であるといっても、そう簡単に納得できるはずはない。事実降園の時、母親の顔を見ると、今まで泣いたりつまらなそうにしたりしていた子供たちの表情がほころんで母親のふところへ飛びこんでいくのである。そのうちに、教師だけしか頼る人がいなくなると諦らめた結果、自分を出してもかまわないと気づくようになるのである。

このような事実を目の当りに見て、私は、子供が自分を出すことができるまでにはかなりの時間かかることを

知らされた。そして、「先生、私のないしょのお話をするね」と耳もとでささやいてくれるようになる頃、ようやく、自分との間にきずなが結ばれることに気づいた。

自分が出せるようになることによって、共に感じ合う喜びを味わうようになる。子供の感覚は鋭く、この人は自分の味方であるかどうかは、かなり早くみつけれらる。いくつかの経験の結果、信頼感が成立していく。それができると子供は、その人の多くを受け入れようとする。つまり相手との間にようやく共感が成立していく。

しかし、大人と子供との間には、共感したと思ってもかなりズレが起る。このズレを教師が感じることが大切であるが、とかく子供のせいにして、教師は強引に自分の方へ引っ張ろうとする。むしろズレを大切にして、その原因を追求したり埋める努力をすべきである。

教師はそうした感性をときずまさないなければならないが、それには教師の自己訓練の結果獲得できるものではないかと思うのである。自分に非を認める謙虚さが必要

であって、これは絶えず努力しなければ、すぐ我田引水に戻る不安定さをもっている。自分を上位に置くのではなく、子供を主体として考えることに徹しなければならぬ。

一人ひとりの子どもが育つために

私は幼稚園教育の中で、自分の発想を転換せざるを得ないいくつかのことがあった。その一つは「一人ひとりの子供はそれぞれ異なる。だから一人ひとりに応じた教育が必要である。一人ひとりの発達を保障しなければならぬ。十把ひとからげでは駄目なのだ。」ということである。

子供一人ひとり、それは、かけがえのない命であり、この世にたった一人しかいないのである。すべては、その子にとって必要なことか、どうかを考えてやらなければならぬ。このことは一斉指導に慣れた私には大変なことであった。もっとも小学校だって同じなのであるが、小学校教師の時は、わからない子供がいたときは、

その子供のせいにして過してきた。同じ教材を与えてついでこない時はどうかみくだいて教えるか、だけしか考えなかった。教材をやさしくすることを工夫するだけであつた。

ところが、幼稚園では、そうはいかない。子供のわからないとかできないとかは、まずなぜかという検討がつかないのである。子供が泣く、という現象は同じでも、その一つ一つの対応は全く一人ひとりがわなければ相手は泣きやまない。しかも、あの手この手とあらゆる智慧を絞って試みた末、ようやく受け入れてくれるものが見つかる。

缺一つだって、見るだけで泣く子供がいたのはショックだった。つまり、内容を易しくくだく前に、その子供の感情をさぐらなければ、コトは解決していかない。その子の気もちにくいこまなければ相手はこでも動かない。その表現も方法も全く一人ひとり異っていて、教師はその一人ひとりの対決を迫られている、ということに気づいたのである。

ごく当り前のことであるけれども、私には大切な発見であった。人間一人ひとり、性格も生い立ちも、そして力も異なる。それに直面して、「その子供にとっての必要さ」を見つけないければならない教師の仕事のむずかしさには、正直いってお手あげの感があった。そして、このことが私の教育観というか保育観をもつうえに役立ったと思っっている。同じことを教師が与えても一人ひとりの子供にとっては意味が違ってくる。同じことを与えることで、教育を保障したと多くの人は、考えるけれども、相手が消化してくれなければ何の意味もなくなってしまふ。同じことを与えることには、どんな意味があるのであらうかという疑問がでてきた。もう一度教育を始めから考え直さなければならぬ。そして、今まで教師側からだけ考えていたけれど、子供からみて、どんな意味があるのかを考えなくてはならないと、思ったのである。

同時に揃えることに、あくせくしていた自分が、みっともなく見えてきた、何よりも、子供たちに本当に済まないと思つた。自分の手腕の足りなさを他の人からみら

れるのが恐しくて、恰好ばかりつけたがった自分を心から恥かしいと思つた。

揃えることのできることは本質的な指導技術ではないという間違ひにも気づいた。それに気づくことによつて、幼稚園教育のよさ、すばらしさがわかつてきた。教科書のない幼稚園。幼児一人ひとりが、その子供の自分のテンポで育とうということを十分に認められる場として用意されている幼稚園教育のすばらしさに、舌をまくようになった。

これは幼稚園教育の独自性でもある。他の学校の真似をすることはない。幼稚園教育だからこそできることなのである。一人ひとりが見える学校とは、何てすばらしいことではないか、集団の中に個を埋没させるのではなく、個の育ちを確かにするために集団が必要なのである。

個と集団

では幼児期に集団生活をさせる意味はなんであるか。一人ひとりの幼児が自分のやりたいことをやるだけ

では足りない。つまり幼児が自己発揮したり、自己表出することによって自分の心を開くとともに、その中で多くのことを受け入れ、学んで身につけていく。このことは幼児自身の内にある願いである。

しかも、人間は人間同士がかかわり合いたい、そして互いに高め合い学び合いたいのである。こうした欲求は人間として生きるための欲求である。

その欲求の実現のためには、自分を無条件に受け入れる家庭だけでなく、多くの場で挑戦していききたいのである。

幼稚園は、そうした欲求を実現させる場である。自分に近い同じような子供たちが集って、仲間を作り、互いにモデルを求めて育ち合い学び合う場なのである。

人間は一人ひとり異なるけれども、同じような、というか、共通な足どりで発達していく。

したがって細かくみれば興味の対象や示し方は異なるが、大まかにみればかなり共通したものである。例えば移動が可能になると言い、這えば立ち、そして歩く、さ

らに色々な方法で運動していく、というようなことは共通の筋道である。人間に興味をもち始めるころになると、「いないいないばあ」から始めて、逃げたり追ったりすることを喜ぶ。子供の仲間ですれを行うときには、しだいにルールや役割をつくって遊ぶようになる。興味の対象は身の廻りから未知なるものまで輪をひろげるといえるように共通するのである。

つまり幼稚園に集まった子供たちは夫々個々に違っても、共通溝をもっている。個が育つためには、そうした関係をもつ集団が必要なのである。

(文部省初等教育局視学官)

